

平成十七年二月一日発行 第十五巻第二号 通巻第一六四号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐 かい

岡井省二創刊

平成17年2月号



炎心

高橋将夫

冬帝を呼んで来たりし陰陽師
ぶつかつて大棉ふつと消えにけり
山鳴りのしてゐる山の眠りかな
熊野路のうす紫の淑気かな

『俳句界』(二月号)八句

f 分の一のゆらぎに初明り
胸のうち明かすことなく山眠る
弥陀ヶ原握りし雪の鳴りにけり
海鼠うごきてハンドルの遊びほど
大寒のびつくり水を注ぎたる
目隠しの鷹一点を凝視せり
雪しまき炎心しづかなりしかな

去年今年
植木戴子

秋篠の森や刀豆干されある
瓜坊の走りしあとの畝間かな
紅葉山石の鳥居の前にをる
大根を抜きたる穴に水の音
万両や酒樽高く積みれある
山楂子の種の形や箒星
冬満月つり橋渡つてをりにけり
梟や眺めてゐたる多宝塔
洋梨の据りのよろしうすみどり
黒谷の風匂ひけり蘆の花

特別作品

道化師のゆらりゆらりと去年今年
小雪や藁を束ねてをりにける
杖ついて坂道登る龍の玉
人参を抜くうしろより人のこゑ
山茶花の辺り歩いてゐたりけり
冬晴やプランクTONの流れゆく
海流の交はるところ髭鯨
櫛の実やからくり時計の回転す
角盆に丁稚洋羹小六月
またひとつ日に向ひをる返り花

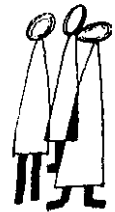
槐安集

市場基巳

きりもなく増えゆく鯛雲かいな
紅葉して水にはりつきみゆる浮葉
黄ばみたる草草映し水流る
ただよへるほか草の穂のこと知らず
蛙呑む蛇を余所目に息をのむ

水野恒彦

湖北しんとかりがね寒き水の色
山々は墓標を隠し末枯るる
空也忌の瓶原にて日暮れけり
朴落葉地にありてなほさまよへる
葱引くや鐘韻長くはるかなり



石脇みはる

酉の市赤膚焼の大絵皿
しぐるるや筆屋の軒を借りぬたる
谷川の淵の氷をへぎにけり
玄冬や玉葱の皮煎じをる
臘八や阿修羅の像の御前に

竹内悦子

昏れがての雨にをりけり鳩のうみ
色かへぬ松のかたへの貸ポート
湖見ゆる山にをりける天狗茸
筆柿や野仏の角曲りたる
湯にもみじ浮かべて極楽とんぼかな

木下野生

冬うらら東京へ行きたいといふ
冬の夜のこれは一輪挿しの壺
二三度は回つて倒れ木の実独樂
冬麗や片手に抱いて赤ん坊
冬日和この人がこの病とは

栗栖恵通子

胸ゆるく十一月の帯をまく
ふくろふの耳うちしたる木喰仏
研ぎたての鎌の匂ひや冬立てり
母すでに繭に籠もりし雪催ひ
夢殿の夢の続きよ白ふくろふ

延広禎一

呼び塩のひとふりありて月清し
秋あかねの交るむかなたや迦楼羅をる
烏瓜疣観の傍へかな
跳ねあがる鯉一ツ目小僧かな
煤逃げを黄泉醜女に追はれたる

中島陽華

人間や婆の差し出す十夜粥
齒ごたえの松茸局部麻酔中
天空海闊みな茸飯食らふ
太き首大きく廻し冬に入る
烏瓜朱し鎌倉露佛かな

加藤みき

鷹トビとなり真澄の空へ昇りたる
遠くまで夜の青空佛手柑
いろいろなこゑの寄りくる芒原
とぼ口は青空なりき龍の玉
喝采や丈の短き冬の菊

雨村敏子

補陀落やはるけきものに寒の雁
虹渡る雁紅き眸を持てり
水の渦つぎつぎ生まれ神渡る
赤蕪を洗うてをるや岐神くまの
神座や月と木星並びたる

大島翠木

夜の添水猪の皮晒しあり
鬱勃と立つ円空と刀豆と
海鼠触る夜に一粒の安定剤
昔男ありけり山は粧ひぬ
青首大根葉をひつさげて運びけり



槐市集

近藤きくえ

楼上の笑まふ羅漢に小鳥来る
三上山晴れて赤蕪引いてをり
菊日和酒樽の辺に軋みかな
落葉舞ふ小鳥のこゑの混じりくる
綿虫の右往左往の一里塚

近藤紀子

記帳する指に残りし穂紫蘇の香
秋日差追うて干物動かせり
糶田を大またで来るほつかぶり
菜には菜の芋には芋の虫のをる
畝を這ふ糶焼く烟の行方かな

近藤喜子

冬怒濤^哮る獣と思ひけり
明けてきし天地大揺れ鶴の声
寒林や二つの耳となつてをり
真言陀羅尼笛鳴きのしきりなる
常ならぬ星のまたたき近松忌

柴田靖子

花八手終の栖のととのひぬ
縁側で爪を磨きし小春かな
闇の音五官に障り冴ゆるかな
山眠る空の青さと海の青
闇揺らす牡丹焚火の生めきし



槐集

高橋将夫選

枚方

中野 京子

城尾れい子様全巻可

石路明るし笑へば涙とめどなく 香川

黒田 咲子

岡崎

近藤 喜子

多羅葉に幸と書きたり神迎へ 枚方

谷村 幸子

日にゆらぐ桜蓼なり朱雀門
芋の葉の露のころがる大和かな
回廊や砂の大海澄みわたる
楽茶碗のまはる掌石路の花
風紋に色なき風の影ありし
一天の静まりかへる尾白鷺
円相の真中にをりぬ冬の蠅
はらわたに光の届く石路の花
人の虚に触れたる冬の虫の声
梟の棲みついてゐる海馬かな
冬帝の吹き清めたる星座かな
地の神に呼び戻されし朴落葉
寒禽のこゑ潮騒に遠からず
昼闇の森に点りし梟の眼
わた虫の宙や前方後円墳

岩月優美子

旧知てふ袖の残り香てのひらに
波さほど荒くはなきに冬ざる
日のあたる背ナどくどくと狩場かな
目のさむくなつてめつむる星の数
石路咲いて河内鑄^{いもじ}物師の系譜かな
菩提寺の和尚白寿や生姜酒
ゆきつきて塑像の群と寒ざくら
補陀落の庭にひととき紅葉照る
あぶり餅に呼びとめられし鴟の晴
柵のこぼれきつたる朝かな
干魚の列なしてをる小六月
新松子金毛閣の夜明かな
冬立てり仕履の締緒りんとして

近藤きくえ

銀河往来 高橋将夫

|| 長寿俳人 ||

◇新年を迎えたと思ったらもう二月。暗い話が多い中で、おめでたい話を紹介したい。堀内子陽氏が昨年十月に九十歳を迎えられた。

「槐」創刊からもう十三年になる。当時の会員はそれぞれ、それだけ齢を重ねたわけであるが、今の「槐」の中でめでたく九十歳を越えられた方は、堀内氏が初めてである。

『俳句朝日』（一月号）の「長寿俳人大特集」で多数の結社の長寿俳人が紹介されている。その中で、堀内氏に係る部分を抜粋させて頂く。

星屑のごと墨飛ばす夏はじめ

「槐」堀内子陽 九十歳

（好きな言葉）

良寛思想が好きと思いつづけて久しく書道と俳句を友に生きている。良寛の言葉に「自然随順、拘泥せず来り行く」。

（王宰の一言）

生涯現役の書道家。生来の自由人。俳句でもますますのご活躍を。

記事の内容は以上の通りで、堀内氏は現役の書道の先生である。長寿社会と言われて久しい。三浦敬三氏は九十九歳でモンブランを消降したという。おおいに勇気づけられる話である。私達の俳句もまだまだこれからだと思えてくる。

◇「槐集」観照

回廊や砂の大海澄みわたる 中野 京子
石庭を巡る回廊。砂の大海が澄み渡っていると言い放つたところが実に爽快である。

梟の棲みついてゐる海馬かな 近藤 喜子
脳の海馬はギリシア神話に出てくる海馬の下半身に似た形で、情動や短期記憶に関係し、時間空間情報の認知と統合作用を行う。そこに梟が棲みついたからには、夜も岡井省二の世界が見えるのだろうか。

冬帝の吹き清めたる星座かな 岩月優美子
澄み渡る冬空。満天の星。たくさんの星座。まるで冬帝が吹き清めたように美しい星空だという。詩と俳諧のアマルガム。

旧知てふ柚の残り香てのひらに 黒田 咲子
「城尾れい子さま全快」の詞書がある。「旧知」と「柚の残り香」に、長かった闘病生活の様子がうかがえる。

多羅葉に幸と書きたり神迎へ 谷村 幸子
多羅葉は写経などにも使われる。「幸」と書かれた多羅葉…まことにめでたい。

あぶり餅に呼びとめられし鴉の晴 近藤きくえ
あぶり餅の店から声がかかったのだろう。呼び止められるのを待っていたような気もする。鴉の贅が思い浮かんだりもしておもしろい。（以下略）